

2021年度 ソニー幼児教育支援プログラム

「科学する心を育てる」～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

心動く環境との出会いから育まれる「科学する心」の芽生えを読み取る

～子どもたちのきらきら輝く虹色の心を見つめて～



丸亀市立西幼稚園

目 次

I はじめに	1
1. これまでの取組(研究の経緯)	
2. 今年度の取組と「科学する心」を育てること	
3. 子どもの内面から湧き出る「科学する心」の芽生えを見つめて *「科学する心」が芽生える過程の構想図	
II 実践事例	2
1. 子どもの豊かな感性を引き出す環境づくりから	
事例1 「園庭に穴をつくろう!」	2
*環境に変化を仕掛けた取組から、今大切にしたい環境づくりについて考える。	
2. 子どもの主体的な姿から「科学する心」の芽生えを見つめて	
*事例における「科学する心」が芽生える過程の構想図 (PI)と関連する視点	
事例2 「たのしいこといっぱい!」(3歳児)	6
*環境との出会いのエピソードから  の具体的な姿を捉える。	
事例3 「れんとゆうひがそれぞれにイメージを広げて遊ぶ姿から」 (3~4歳児)	11
*保育者の関わり  を視点に振り返る。	
事例4 「カタツムリどうしたん!？」(5歳児)	16
*友達と伝え合う姿を  に視点をあて読み取る。	
事例5 「ふわふわって落ちてくるようにしたい」(5歳児)	17
*試すことを楽しむ姿から、互いの  や  が絡み合い、 どんな経験へとつながっているのかを読み取る。	
III 子どもたちの姿から学んだこと、今後に向けて	20

I はじめに

1. これまでの取組（研究の経緯）

本園は、豊かな自然を日々の遊びや生活の中に取り込む工夫を重ねながら、子ども自らが環境に関わり夢中になって遊ぶ姿を大切にして「感じ・考え・伝え合う子どもの育成」に努めてきた。子どもたちが自分で選んだり決めたり創り出せたりする環境、じっくり何度でも自分の思いを追及できる環境、友達や保育者、色々な人の感じ方や考え方に触れることのできる環境であることに留意し工夫する中で、子どもの気付きや考えのすばらしさ、予想を超える感性の豊かさに驚かされている。そして、「すごい!」「面白い」と一緒に笑って笑い、考え、心動かす保育者の存在、人的環境として大きな役割があることも共通理解してきた。そして今、私たちは、子どもたちの姿から心底学ぶことを楽しみ、子どもたちとともに環境を作っていくことを再確認し合い、常に意識しながら取り組んでいる。

2. 今年度の取組と「科学する心」を育てること

今年度は、教育目標を「心豊かに いきいきと 未来へ踏み出す子どもの育成」とした。ここで捉える未来とは一瞬先のことであり、人工知能などの科学技術が急速に発展しているであろう 20 年後のこととしても捉えている。予測し難く見えにくい未来であるが、その社会を担う子どもたちに、「それぞれに自分らしい人生を切り拓いてほしい」「自分の良さを発揮しながら社会の中での役割や責任を担い、人とつながりながら生きてほしい」「いろいろな環境や人、できごとに出会った時、力強くもしなやかに人生に豊かさや幸せを感じて生きてほしい」と願う。そのためにはまず、私たち保育者が創造力を発揮して未来社会を見据え、これまでの保育の「当たり前」を見直しながら、子ども一人一人の主体性を引き出し、子どもと一緒に生活を創り出すということを大切にしていきたい。そういう思いを職員間で意見交換し共有しながら、「子どもたちの自由な発想や創造力」を引き出し「心豊かでしなやかなコミュニケーション力」を育てていきたいと考え取り組んでいる。それはまさに「科学する心」を育てることにつながる。好奇心や考える心、その心の動きから生まれる創造性、自分の思いや考えを表現しながらつくり出していく楽しさや、やり遂げる心を育てていきたい。

3. 子どもの内面から湧き出る「科学する心」の芽生えを見つめて

「科学する心」が芽生える過程の構想図



本園では、『一人一人を大切にみんながのびのびと自分らしく育つ幼稚園』を基本方針とし、子どもたちが「ありのままでもいいんだ」「それぞれの思いや行動を肯定的に受け止められている」という安心感をもって、その子らしい、素直な感じ方や思いを表出できるような環境づくりに取り組んでいる。

子どもは、様々な環境と出会い、対象となるものに諸感覚を使って触れていく中で関心が高まり、思わず近づいたり、触れたり、もっと知りたい、聞きたいという知的欲求を膨らませ思考が働いたり「やってみる」という実体験へとつながっていく。その過程で「面白い!」「どうして?もっと知りたい」「もう一回やってみよう」と心が動き、不思議だなあと感じたり、何かに閃いたり、自分なりの解釈を見出したりして、「科学する心」の芽生えとなる、考えたり試したり表現したりすること自体を楽しむような意欲ややり遂げる心が育っていくと考える。

豊かな環境との出会いが大切だと考えるが、その際最も大切にしたいことは、子どもの中にも保育者の中にもなんとなくある、無意識にもつ常識的なこと、決めつけ等の「わく」を取り払い、子どもが感じたままの、ありのままの、素の感性を引き出せるようにすることである。そのためには、常に自分の心と向き合い自己を振り返り、また職員間で話し合いながら、そのことに留意して取り組んでいきたい。

Ⅱ 実践事例

Ⅰ. 子どもの豊かな感性を引き出す環境づくりから

【事例Ⅰ】「園庭に穴をつくろう!」

子どもたちが今したい遊びを本当に楽しめているのだろうか、やり慣れた遊びだから何となくそこにある遊びを楽しんでいるに過ぎないのではないかと、保育を振り返りながら、常に心を揺さぶる環境づくりについて探り考えていた。そして、昨年度コロナ禍で、今までの当たり前が当たり前ではなくなるという現実と直面し、子どもたちには、目の前の状況を自分自身で把握し受け止め、それぞれが自分のもてる力を十分に発揮しながら、考えや力を出し合い創意工夫していくことの良さや面白さを感じる経験がとても重要なのではないかと考えるようになった。そんな頃、園舎建て替えのための事前調査で、園庭に穴を掘ることとなり、私たち職員は「思ってもないチャンス到来!」と感じた。調査のために掘った穴を残してもらうことで、「あるはずの地面が無い!」「今まで見えなかった地面の下が見える」という、子どもたちにとって当たり前が当たり前ではなくなる園庭の環境を作ることができるのではないかと考え、ワクワクしながら取り組んだ。

【工事の日の様子】(R2.12.25)



穴の断面には、地層が見え、宝探しや、化石発掘ごっこが始まるかもしれないと思った。子どもたちはどんな発見をしたり、どんなアイデアをひらめいたりするのだろうと、とても楽しみに感じた。

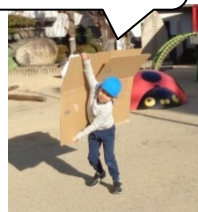
【新しい環境への親しみや興味・関心をもつ】(R3.1.8) (3歳児ピンク帽子・5歳児青帽子)

氷が張る寒い日で風も強かったため、穴の近くに来ていたみほは、ガタガタ震えながら泣き始めたが、部屋には帰らないと言う。風も強かったので、穴の中の方が温かいかもと保育者と一緒に入ってみる。でも、まだまだ寒い様子だった。5歳児のようたが「壁を作ってあげる」と部屋から段ボールを持ってきてくれた。

氷ができてよ!
わ〜冷たい!



風で飛ばされる〜



【保育者の読み取り】

3歳児にとって、驚くほどの寒さだったと思うが、寒くてもここにいたいと思わせる何かがあったのだと思う。それは、穴や山など、変化した園庭環境そのものだったかもしれないし、氷を嬉しそうに見つけたり、風が吹くと「飛ばされる〜」と笑っている自分とは違う感じ方をする5歳児のお兄さんお姉さんの姿を見たりして、刺激を受けたからかもしれない。そして、泣きたくなくなるほど寒いと感じながらも、それでもここにいたいと思っている、みほの思いに寄り添い「どうしたら少しでも温かくなるかな?」と一緒に考える保育者や、その姿に気付いて段ボールを持ってきてくれるようたの自分を思ってくれる気持ち、くっついていてくれる友達や先生の温かさなど、その全てが合わさり、みほに伝わっていると思う。きっと、このような心と体に響くような環境との出会いが、みほの、新しく出会った環境に親しみをもち、もっとあの場所で遊びたいという意欲へとつながってってくれるのではないかと考えた。

【発見や気づきを活かして遊ぶ】(R3.1.14) (4歳児)

築山の表面の、石のように固まった土を手に取り、地面にぶつけると割れることを発見した。石みたいに見えるのに割れるという予想との違いに驚き何度もやってみていた。そして、何度もやるうちに、割れずに転がる石の動きの面白さを感じ、今度はよく転がりそうな石を探して転がし始めた。友達も加わり、どっちが遠くまで転がるか競争になり、それぞれに石を見つけに行き、選んでは転がし、気づきや発見を伝え合っていた。



【保育者の読み取り】

穴を掘り、山を作ったことで、園庭が様々な大きさや硬さ、形の石に出会える環境となり、割れそうにない石が割れたり、転がりそうと予想して選んだ石が思ったように転がらなかったり、よく転がる石に出会ったりなど、予想し、やってみる中で、「あれ?」「おかしいな?」「なんでだろう?」と思いを巡らし考え、さらに予想しやってみるといった試行錯誤する繰り返しの面白さを味わっていると感じた。



【異年齢で関わり合って遊ぶ】(R3.1.15) (3歳児ピンク帽子・4歳児オレンジ帽子・5歳児青帽子)



はるまが以前砂場で使っていた筒を持って来て、「これで、ここから砂場まで(実際には7~8mの距離がある)水を流そう」とようたを誘う。水を流すと土が柔らかいので水圧で川のようになりながら流れていく。その様子が面白く、周りで遊んでいた子も見ていた。ようたが流した水が、下に向かっていき、山の下の方では、はるまが斜面に沿って水を流そうとしていた。しかし、カーブする部分は水圧で水があふれてくる。最初は手で抑えていたが、何度かするうちに、水が漏れないよう周囲の土で土手をつくったり石を置いてみたりするようになっていった。

水が漏れないように、はるまが石を並べた部分を見て、4歳児のとおりが「恐竜みたい!」と興味をもった。前日の遊びから恐竜のイメージが膨らんだのかもしれない。そして、ようたとはるまと一緒にバケツに水を流すと、石を並べた部分に水が流れ込んでくる様子を前かがみになりながら見ていた。水の勢いが強く、石で作った土手を乗り越えて溢れ出した様子を見て、「そうや!とおるも石持っとる!」と言い、急いで保育室から石が入ったビニール袋を持って帰ってきた。そして、土手の部分に自分で石を並べ始めた。ようたが水を流すと、自分が並べた石が水をせき止める様子を嬉しそうに見ていた。

恐竜みたい!



そうや!とおるも石持っとる!



<前日の遊びの様子>

はるまとようたは、恐竜の化石を発掘するかのように、石を掘り出しては図鑑と見比べながら並べて、いろいろな恐竜を形作っていた。そんな様子にとおりも関心を持ち、自分も石を拾って、図鑑と見比べる様子が見られた。





はるまやようた、とおるの様子や、水の流れる様子を少し離れたところからずっと見ていた3歳児のつばさは、『水が石の隙間を通り抜けている』という自分の気づきはるまに伝え、はるまもつばさの疑問に、人間と水を比べて、『石を重ねることで、人間より力が弱い水の力に耐えられるようになる』と、自分なりの言葉で説明しようとする姿が見られた。

【保育者の読み取り】

5歳児のはるまとようたは、新しい環境と出会った時に、これまで経験してきた遊びの中で得た知識や感じたことを活かしたり、イメージをつなげたりして遊んでいた。それは、遊びを通して、その子なりの学びが積み重なっているからこそのことだと感じられた。『築山の土がとても柔らかい』『石に色々な形や色がある』など、今までの環境との変化を具体的に感じ取り「今までとここが違う。これならどうなるだろう!」「今までよりすごい物ができるかも!」と探求心や意欲へとつながっているのだと思った。

4歳児のおとるは、前日からはるまやようたのしている遊びに関心があり、この日も、偶然目にしたというよりは、「今日はどんなことをしているのかな?」と関心をもち自分から様子を見に来たのではないかと感じた。そして関心をもって見ている中で、「そうや!とおるも石持っとる!」とひらめき、遊びに加わることで、はるまの面白さが、とおる自身の体験となり、共に面白さを味わう経験へとつながっていった。また、3歳児のつばさには、お兄さんたちの遊びの様子をよく観察しているからこそその気づきがあり、5歳児のはるまには、水圧など、実際に触れているからこそその気づきがある。二人が、それぞれの感じ方を伝え合うことで互いの違いを感じ合う機会になっていることも、物事を多面的に捉える力につながるとも素敵な経験だと思った。

【天気によって変わる穴の変化を感じ取り、遊びに取り入れていく姿から】(R3. 2. 15) (3歳児)



穴を掘ってすぐは、雨が降っても水が溜まることはなかったが、日がたつにつれ、水はけが悪くなり、雨の水が溜まるようになっていった。そして、この日は、朝方に雨が強く降ったこともあり随分多く水が溜まっていた。クスノキの葉を水に浮かべて魚に見立てて捕まえようとしている。なんとか魚を捕まえようと、バケツやスコップ、おたま、茶こしなど、砂場や色水などの道具からよさそうと感じる物を自分で選んで持ってきてやってみる姿が見られた。

【保育者の読み取り】

数日前、メダカのビオトープや園庭の水たまりで、藁や木の枝を釣り竿に見立てて魚釣りごっこをしていた姿が目についた。この頃、魚釣りのイメージで遊ぶことが多かった3歳児にとって、穴に水が溜まった大きな水たまりは、魚がいる海や池のような感じがしたのかもしれない。すぐおうとしても逃げるなど、捕まえようと夢中になる中で、水の動きを体感していると感じた。また、葉っぱを魚に見立てて遊ぶ発想がとても面白く、葉っぱが水に浮かんだり、沈んだり、水の流れに乗って動いたりする様子が本当の魚のようだったので、なんとか逃げる魚を捕まえたという気持ちが高まり、それぞれが夢中になって道具や捕まえ方を工夫していたのだと思う。

メダカ釣りごっこの様子



【考察】

- 子どもたちは、園庭に穴ができたことで、地面の下に埋まっている石や土に関心やイメージが広がっていった。きっと、地面に穴を掘らなければ、地面の下がどうなっているのかなどということに思いを馳せることはなかっただろうと思う。しかし、ここでは、関心をもったことが重要なことではなく、例えば、『地面を掘ったら、新しい楽しさや面白さに出会える』などといった、当たり前にある地面の下にはまだ自分の知らない世界があるというワクワクする気持ちを体験の中で感じ取っていることが何よりも重要だと感じた。
- 新しくできた環境と出会い関わる中で、子どもたちは、自分たちで作りだしていく面白さや、工夫次第でもっともっと面白くなるという試行錯誤の楽しさを味わう経験をたくさんしたのではないかと思った。子どもたちの心を揺さぶり、「常識的なことに収まらない、自由な発想や創造力を引き出したい」という、園庭に穴を掘るということに込めた私たち保育者の願いが、子どもたちに届いていると感じた。
- 子どもたちは新たな環境と出会った時、興味をもつ気持ちとともに、驚いたり、不安に感じたりなど少し後ろ向きな気持ちを感じることもある。3歳児みほの出会いの場面では、涙が出るほどの寒さだったが、それでもここにいたいと思っているみほの願いに寄り添い「どうしたら少しでも温かくなるかな?」と一緒に考える保育者がいたことで、みほは「寒いから、やってみたいけどやめよう」と諦めてしまうことなく、新しい環境に、先生や友達の温かさを感じながら出会えたのだと思う。「やってみたい」と感じ、躊躇なく「やってみる」こともあれば、時には、後ろ向きな気持ちが大きくなり、「やってみたい」という気持ちが消えてしまいそうになることもあると思う。そんな時、困っていることや不安な気持ちに寄り添い、一緒にどうしたらいいか考える保育者の関わりが「やってみたい」という気持ちから「やってみよう」と一歩踏み出す気持ちを支えるのだと思う。そして、表面には表れにくい、その子の膨らみかけている願いを保育者が敏感にキャッチする力を培っていく保育者の資質の向上がとても重要だと思った。

子どもたちが作り出したいろいろな遊びの様子



2. 子どもの主体的な姿から「科学する心」の芽生えを見つめて

事例2 「たのしいこといっぱい!」(3歳児)

事例2では、子どもたちがどんな体験をしているのか、『「科学する心」が芽生える過程の構想図』(PI)で示す8つの姿、見る・考える・試す・気付く・表現する・伝える・触れる・感じるで捉え、読みとっていきたい。

【いろいろな生き物との出会い】(R3.5月～6月)

はやとは虫や生き物が大好きで「これは〇〇やな」「知っとる知っとる!」と見たことがあるものや、図鑑や本で知った知識をよく教えてくれていた。

エピソード1 ～テントウムシとの出会い～ (5月中旬)

園庭の花にテントウムシがとまっているのを見つけ、捕まえる。りえこと一緒に観察しながら「テントウムシ、今羽広げた!こうやってした!!(手を広げる仕草をして)」「ぼくの手、歩きよな」「こしょばい～(くすぐったい)」などと、見たことや感じたことを言葉にしていた。



エピソード2 ～ツマグロヒョウモンとの出会い～ (5月下旬～6月下旬)

園庭で、4・5歳児が次々とツマグロヒョウモンを捕まえる様子を見て「ぼくも欲しい」とつぶやいていたので、保育者が「一緒に探してみよう」と言う。「もうおらんのか」「先生、見てよ」と言う。「かくれんぼしてるのかな?下の方にいたりして」と、一緒にビオラのプランターをのぞくと小さな幼虫を発見。「おったー!!!!」とはやとは大喜びで、すぐに虫かごに入れ、それから年中児の見よう見まねで世話を始めた。保育者は「ツマグロヒョウモンさんは、なに食べるのかな」と一緒に図鑑で調べたり「このお花が好きなのかな?」とビオラの花壇に誘ったりなど、はやとの興味・関心に合わせて関わった。毎日、虫かごの掃除をしたり、エサとなるビオラを集めたり、観察したりする中で、一匹のツマグロヒョウモンがさなぎになり羽化した。羽化までの流れを保育者が写真にまとめて掲示していると、それと実物を見比べながら「こうなったら、次はこうなるんやな(色は黒いまま横向きに虫かごにくっつき、次第にぶらさがること)」「今はここやから、もうすぐちょうちょや!」などと、保育者に言い、残りの幼虫をさらに興味をもって観察する姿があった。



おったー!!!

うんちした!
お腹すいてるかな?



めだまだした!



羽、閉じとる。動かん...

エピソード3 ～カタツムリとの出会い～ (6月下旬)

保育者が家の花壇にいたカタツムリを園に連れてきた。図鑑に「カタツムリは殻を取ったら死んでしまう」と書いており、はやとはそのことを覚え「カタツムリは殻がないと死ぬんよな」と毎日のように言っていた。ある日、カタツムリが殻に閉じこもっていて頭が見えない日があった。すると「あれ!?」「カタツムリは!?」「殻がないんかな...」と焦って心配していたが、霧吹きで水をかけるとカタツムリがニョキニョキと顔を出したのを見てほっとした表情に変わり「めだまだした!!」と大喜びするはやとの姿があった。



【保育者の読み取り】

はやとは毎日、園で虫を見つけることを楽しみに登園している。捕まえられたことに嬉しさを感じている気持ちもあるが、図鑑を見ながら観察することがはやとの楽しさにつながっているようだった。ただ見ているだけではなく、虫の様子や気付いたこと、発見などを次々と口にし「知っとる知っとる!」と自分のもっている知識と照らし合わせることもあった。エピソード2では、実際に自分が見ている姿と、保育者が掲示した写真を見比べて「もうすぐこうなるな」と予想する姿があった。また、エピソード3では、図鑑で得た知識をもとに毎日観察し、カタツムリの顔が見えなかった時に「殻がないのかもしれない」と想像し心配する姿があった。どちらも、図鑑や写真など視覚的な環境があったことでさらにはやとの関心が高まっていたように思う。いろいろな生き物との出会いを通した子どもの素直な気付きや発見を保育者はありのまま受け止め、さらに興味を深めていけるような環境の工夫を今後もしていきたい。

【自分の野菜が育つ過程を知って】(R3.6月初旬)

クラスで一人ずつ夏野菜を育てることにし、ミニトマト・ピーマン・ナスの中から好きな種類を選んで、5月上旬に各自のプランターに苗を植えた。ほとんどの子がミニトマト、数人がピーマンを選ぶ中で、ナスを選んだのはまいだけだった。「ナス好き」「早く食べたいなあ」と楽しみにし、毎朝大事そうに水をやり世話をしていたある日、小さなつぼみができていることに気付く。「なにこれ?」「なんかある」「先生、ちょっと見てよ」と保育者を呼ぶ。保育者と一緒に観察し「なんだろう?」「なんか色がついていない?」「もしかしてお花が咲くのかな?」と話した。他の子のトマトはもう少し早くに花が咲いていて、それと見比べながら楽しみにしていた。数日経つと、つぼみが開き紫色の綺麗な花が咲いた。それに気付いたまいは「先生きてー!!」とまた保育者を呼び、嬉しそうな表情で「花が咲いてるよ」と教えてくれた。「ほんとだね、綺麗な色だねえ」「嬉しいね」と、待ちわびていたお花がやっと咲いたことを一緒に喜び合った。それから、以前より増して何度もプランターを見に行くまいの姿があり、本当に嬉しそうな様子を感じられていた。数日して、何だか花の様子がおかしい。綺麗に咲いていた花が下を向き、色も茶色っぽくなってきている。まいも気付く「枯れちゃった…」とつぶやいた。保育者はこの過程があって実ができることは知りつつも、図鑑や本を見せ「こんな風になっていくよ」と伝えることも考えたが、まいと共に観察してどうなっていくのかを一緒に見守りたいと思い、あえて知らせなかった。「ほんとだね、枯れちゃったのかな」「昨日までお花咲いてたよね」と保育者が声を掛けると「お腹すいたのかな」と言うので一緒に水をあげる。「元気になるといいね」「まいちゃん毎日お世話してたから大丈夫だよ!」とまいのショックな気持ちに寄り添いながら「明日はどうなっているかまた一緒に見てみようよ」と保育者が言うとうん…と答え、少し悲しそうではあるが一緒に様子を見ていくことになった。数日間、同じように観察していくと「枯れとる」「茶色い」と変化はないが、毎日一緒に見続けていた。ある日、まいがまた興奮した様子で「なんかある!!!!」と言った。保育者もすぐかけ寄り「どこどこ!?!」と見てみると、しおれた茶色い花の下から何だか出てきているのが見えた。「なにこれ?」「なんかあるね」「なんだろう」と言い合い「…ナスビじゃない?」とまいが言った。「ナスビなのかな!?!」と他の職員も集まってきて、みんなで興奮しながら見た。それから、観察していくとだんだん実が大きくなってきてナスができていることが分かった。それからのまいは、次の花が咲いた時も、花が枯れて落ち込むことはなく「またできてる」と二つ目のナスができることを喜んで楽しみにしていた。



【保育者の読み取り】

自分の好きな野菜を選んだことで、まいのナスに対する関心度は高く、毎日自ら観察し、生長を楽しみにしていた。また、他の友達の野菜の生長の過程を見ていたからこそその期待もあった中で、花が枯れてしまった時のまいはショックな気持ちが大きかったと思う。しかし「まだ元気になるかも」と期待と願いをもって世話を続けた結果、実ができる過程を知ることができた。一度、実ができる過程を知ってからのもまいは、次同じ状況になった時も動じなかった。それは「花がしおれたらそこから実ができる」ということを学習し、次同じ状況になった時も「これもきっと実になるんだろうな」ということが予測できているということだと思う。まいにとって初めての経験が知識につながり、それを活かしている姿が見られた。

【友達の姿を見て新しい方法に興味をもつ】(6月初旬)

りょうは水が入ったたらいからジョウロに水をくみ、その水を園庭の穴に流したり、フライパンに移し替えたりすることを繰り返し楽しんでいた。

しばらくすると、次はふるいを持ってきてそこに水を入れようとし始める。しかし、水はふるいに全くたまらない。



りょう

りょうちゃん、お水入れているの〜?

保

でもな、水が出るん

保

穴があいとるけんや

なんで出るんやろ〜

保

ほんまやな!先生もやってみよ〜

りょうは、水の中にふるいを出し入れすることを繰り返し楽しむようになった。保育者は、りょうと一緒にふるいを持ち、同じように遊びながら関わった。りょうは「きゅきゅ」と喜びながら、水の中からふるいを出す瞬間「ザバー」と口にしていた。その様子を近くでけいいちが見ており、りょうに話しかけた。



これは水出んで

なんで水が出ないの!?

穴があいてないけん

けいいち

ほんとだ〜りょうちゃん、これなら水が運べるね!

水、出んなあ♪

りょうは、けいいちの話を聞いてにこりと笑い、保育者と一緒に型抜きのカップを取りに行く。そして、今度はそのカップを使って水を出し入れすることを繰り返し楽しむ姿があった。

【保育者の読み取り】

最初はジョウロから色々な場所へ水を移し替えることを楽しむりょうの姿があり、この場面も最初は「水を運びたい」という思いから始まったのだと思う。しかし、道具として選んだふるいには穴が空いていて水がたまらないことに気付く。次第に、りょうの思いは「水を入れて運びたい」というものから、穴から水が出てくる面白さを感じるものに変ってきていたように思う。そして、けいいちの発言から新しい道具の存在を知り「自分もそれでやってみたい」という興味と意欲にさらに気持ちが変わる。新たな道具でやってみる中で、りょうの中には「水を運びたい」という思いは薄れていき、今度は、水がたまっていく面白さを感じるようになっていたと思う。この場面からは、りょうの様々な気持ちの変化が読み取れた。3歳児は、いろいろなものに興味が移り変わり、最初は「こうしたい!」と思っても、目の前の興味のあるものに惹かれ、次々と遊びが変わっていく。また、友達の姿から関心をもち新たな道具や方法に出会うこともあるだろう。その中でその子なりに考えたり試したりしながら、経験を重ねていく。だからこそ、保育者は子どもの興味の移り変わりにじっくりと関わり、どこに「楽しさ」や「面白さ」を感じているのか読み取っていくことが必要だと考える。

【いろいろな方法で試して、柔軟な発想で】(R3.6月上旬)

ある晴れた日、園庭の穴に水がたまっていないことに気付き、みんなで水を入れることになった。保育者も共に、ジョウロやバケツなどで水を流していく。あかねはジョウロを穴の斜面に斜めに置き、水が勝手に流れていくようにしていた。かけるもそれを真似してジョウロを斜めに置くが、水がすぐに止まるのが気に食わないようだ。「あーすぐ止まる…!」「もっと流すものないかな」と言い「そうだ!」という表情をして、色々な道具が置いてある棚のところへ走った。数日前に年長児と一緒にといて水を流した経験があったことから、保育者は「といを持ってくるのかなあ」と思って待っていた。すると、かけるは※底にいくつか穴の空いた新幹線の玩具を持って笑顔で走って戻ってきた。「これ穴があいとるけん、水入れられるかも」と言って、たらいの中に沈ませブクブクと水を入れだした。そして、それをジョウロの穴の上で持ち、ポタポタと水を流し始めた。



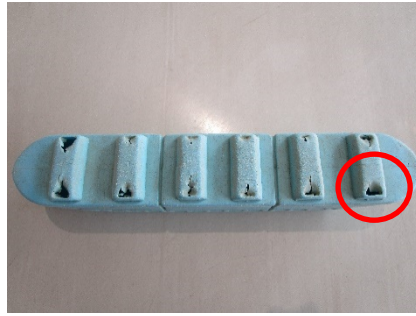
あかねこれ「自動」なの(じょうろを斜めに置いて)

かけるばくも同じようにしたいな…

水入れられるかも

ちょっとしか入らん!

※新幹線の玩具



裏返してみると…

子どもたちが、繰り返し土の上を走らせたり滑らしたりして遊んだ結果、穴が空いていた

【保育者の読み取り】

かけるは自分なりに、どうしたらもっと水が流れるのか、どんな道具がいいのか考え、実際にやってみるという行動を取っていた。様々な道具がある中で、穴の空いた新幹線の玩具を選んだことは保育者にとって本当に予想外の発想だった。水を流すための道具としてよく使われるジョウロやバケツではなく、あえて穴の空いた玩具を選び、しかもかけるにとってはそれが壊れているというマイナスな認識はなく「穴が空いていて良いかも!」という前向きな考えだった。意外なところに着目し、自由な発想で道具を選択する姿は、3歳児ならではの固定概念に捉われない姿だと感じた。保育者自身も子どもなりの発想をありのまま受け止め、一緒に考え試す姿勢でありたいと思うと共に「壊れた玩具はもう使えない」と思ってしまいがちな概念を取り払い、かけるのような柔軟な発想を大切にしていきたいと感じた。

【不思議を感じる心の芽生え】(7月上旬)

ペットボトルの底や側面に穴を開けたものを準備しておく、いろいろな方向に水が出る様子を見て、「タコさんみたい」とイメージし、喜んでやっていた。この日も、タコさんに水を入れて何度も繰り返し楽しんでいたけいいち。近くでまいが小さなペットボトルに水を入れてフタをし、シャカシャカ振って遊んでいたのを見て、けいいちも「フタがほしい」と言う。保育者と一緒に探してフタを見つけ、タコさんにフタをすると、水が出てこない。「あれっ?」とけいいち。保育者も一緒に「あれっ!?!」と不思議がる。フタをまた開けると水が出てくるのを見て「なんでやー!!」と大興奮で、興奮した拍子にペットボトルを強く手で押すと、穴から水が出てくる。また「なんでやー!なんでやー!!!」と大興奮のけいいち。しばらく、フタを閉めたり開けたり、手で押したりし、水が出たり出なくなったりする様子を見て不思議がり、繰り返しやっていた。



なんでやー!!!



【保育者の読み取り】

この日まで、毎日のプールや水遊びでタコさんで遊ぶことを楽しんできた。穴から水が出る面白さや楽しさはすでに感じていて、その上で今日の発見があった。保育者も、意図的にフタを用意していたわけではなく、たまたま近くに色水用のワゴンが置いてあり、たまたまいがそこからフタを持ってきており、それをけいいちも付けてみようと思った、偶然に偶然が重なった発見だったと思う。けいいち、何度も繰り返し「なんでやーなんでやー!!」という言葉の口にしてきた。その言葉から、不思議に感じている様子が見て取れる。フタをしていない時は水が出ていたのに「どうしてフタをしたら出ないの?」「どうして押したらまた出てくるの?」「なんでだろう、不思議だな」という思いが、けいいちの繰り返し何度もやってみる姿から読み取れる。それは3歳児が、興味あるものに出会い「なぜ?」「どうして?」と純粋に不思議に思う気持ちの芽生えだったように思う。その思いは、近くにいたかけるやまいにも広がり、保育者も共にみんなで「なんでだろう?」と考える時間となった。

【考察】

- 図鑑や写真、絵本などがあることで、目の前のものと照らし合わせ考えたり、保育者と共に考えることで「そんな考えもあるんだ」「そういうやり方もある」と気付いたりするのだと思う。そこで得た知識や経験が、さらなる興味を沸き立たせ、次の活動や遊びに活かされていく。また、子どもの気付きや発見をそのままにしていると、せっかくの気付きもそこで終わってしまう。保育者が子どもの言葉に「そうだね」「なんでだろうね?」と受け止めたり問いかけたりすることで、子どもの発見や疑問はさらに深まっていくのだと感じた。子どもの興味・関心がさらに高まったり深まったりするためには、視覚的な環境や、気付いたことや感じたことを保育者も言葉にして伝えていくことが大切だと考える。
- 日々、一緒に過ごす中で、繰り返し試して遊ぶ姿が多く見られる。3歳児なりに、出来事に「不思議さ」「面白さ」「疑問」「感動」などを味わい、それを言葉にしながら繰り返し遊んでいる。偶然に思いついた発想もあれば、友達の姿を見て知った発想もあり、どちらもすぐに試そうとしている。3歳児は、何にも縛られない、捉われない自由な発想で、思いついたことはすぐに試そうとし、それが思いがけない面白い発見や気付きにつながっているのではないだろうかと思った。「こうしたらこうなるのかも」「これはできないかも」と考えたり予想したりする前に直観的に「面白そう!」「なんで?」「不思議だな」と感じ「やってみよう」と思う子どもの心の動きを大切に、どんな発想も丁寧に受け止め、保育者も一緒に考え試す存在でありたい。

★事例2の、自分から関心を持ち、その子なりに環境と関わる姿から読み取れる「科学する心」の芽生え★

見る

子どもたちは、関心をもったものを『見る』ことで、何かに気付いたり、知ったり、イメージを膨らませたり、考えたりしていた。そして、『見る』と表現される動きをよく読み取っていくと『細かな部分まで見る』『見比べる』『繰り返し見る』『想像しながら見る』など、様々な『見る』があると感じた。また、同じ物でも関心をもって何度も見ることで、今まで見えていなかった部分が見えてきたり、違う見方があることに気付いたり、子どもたちが体験の中で『見る』ことで気付きが深まったり、広がったりしていく面白さを味わっていることが、とても大切な経験だと思った。

考える

環境に出会い、触れた瞬間から考える姿があった。特に、こんな風にしてみたいとイメージを膨らませている時や、予想外の出来事にであった時、子どもたちは「どうしたら～できる?」「どうして～になる?」と今までの経験や知識、目の前の出来事や物を見たり、触れたりすることを通して気付いたことなどを総動員して、自分なりの考えを生み出そうとしている。そして、試そうとする姿には、無心にやってみようとする姿もあれば、疑問を抱き「何で?どうして?」と繰り返しやってみたり、予想や見通しをもって調べたりする姿がある。また、方法や道具を自分で選ぶなど実際にやってみることで新たな気付きや発見をし、さらに興味・関心が高まっていくのだと思った。

気付く

子どもたちは、自らの体験を通して『違い、変化、特徴や特性、法則性』など実に様々なことに気付いている。特に、驚くような不思議なことや予想と違うこと、感覚を刺激することに出会った時、子どもたちは繰り返しやってみるという姿が多く見られた。そして、何度やってもいつも同じことが起こることを体験したり、何度もやるうちに、条件が変わると同じようにならないことを経験したりし、繰り返すからこそ感じ取ることができる特性や特徴、法則性に気付いていくことが、その子ならではの知識や学びとなっていくのだと思う。

表現する

伝える

子どもたちは『気付きや感じたことを話す』『予想を話す』『理由を説明する』『様子を動きや言葉で表す』など、表現することで、保育者や友達から共感されたり、友達の考えから刺激を受けたり、楽しさや面白さが膨らんだりし、もう一度見たい、やってみたい、今度はこのやり方でやってみたいと意欲が高まっていくのだと思った。

触れる

様々な感覚を働かせて触れることで、体で感触を感じると同時に、驚いたり、不思議がったり、喜んだり心で様々な感情を感じる姿があった。心が動く触れようしたり、触れることによって心が動いたり、心と体はつながっているということを改めて感じた。そして、様々な感情を味わい、感動体験をすることが、見たい、触れたい、知りたい、試したいといった「やってみたい」という気持ちの原動力になっていると思った。

感じる

事例3 「れんとゆうひがそれぞれにイメージを広げて遊ぶ姿から」(3歳児10月～4歳児6月)

色水や石鹸遊び、泥遊びなどは、以前よりずっと引き継がれてきており、園庭の大きなクスノキの下やテラスで、心地よくそよぐ自然の風を感じながら、日常的に展開されている遊びである。3歳児も、4、5歳児の遊びの様子を見て、「楽しそう」「面白そう」「自分もやってみたいな」と心が動き、見よう見まねで自分から道具を手に取り、やってみようとする姿が見られている。4月に入園し出会ったれんとゆうひは、よく一緒に遊び、時にはいざこざもあり、気心が知れた間柄である。れんは、全身で泥や泡、水の感触を感じながら遊ぶことが好きで、ゆうひは、じょうごなどの道具に関心が高いようである。同じ環境に出会ってもそれぞれに違った感じ方をして、互いに刺激を受けながら楽しんでいる。

【あわあわぶくぶく ♡ ゆうひ、じょうごと出会う】(R2.10) (3歳児)



大好きなダンスのキャラクター、アソブンジャーになりきって(帽子をかぶり)、石鹸クリーム遊びに夢中のれん(左)、ゆうひ(右)。互いに無言で、手元に集中している様子である。れんは、右手で石鹸クリームを手ですくい、左の器に入れようとしている。石鹸クリームは濃く、量的にも少なくなってきたおり、かき集める必要があるのか、真剣な目で注意深く見ながらすくい取ろうとしている。一方、ゆうひは、作った石鹸クリームを手ですくい、じょうごを使ってパフェカップに入れようとする。



ゆうひは、石鹸クリームがじょうごの先に詰まっているのか、細めの泡だて器でつついたり(①)、じょうごごと、器のクリームにつけて、クリームを通そうとしたりしている(②)。じょうごにまだ詰まっている部分をじょうごの反対側からのぞいている(③)。今度は、泡だて器の取っ手の、細い棒の方を使ってじょうごの細い穴を繰り返し突いている(④)。れんは、ゆうひの様子に気付き、手を止めて、ゆうひの手元をじっと見ている(④)。ゆうひは、石鹸クリームがじょうごにつまらないようにするためにもっと混ぜた方がいいと考えたのか、石鹸クリームを泡だて器で混ぜる。その後、れんは、ゆうひが使おうとしている細長いグラスに触れている。ゆうひは、顔をしかめながらも、れんがグラスに触ることを何も言わず受け入れている(⑤)。



ゆうひは再度、石鹸クリームをグラスに入れようと、じょうごを両手で持ちグラスのふちにセットする(⑥)。そして、ボウルも両手で持って石鹸水をじょうごに入れようとする様子を見て、保育者がそっとじょうごを支える(⑦)。ゆうひは、頬が少し緩み、続けて石鹸クリームをじょうごに入れ、れんも、ゆうひが入れている石鹸クリームが細長いグラスに入っていく様子を見ている。全部の石鹸水を入れ終わると、ゆうひとれんが顔を見合わせ笑い合った(⑩)。



今度はカフェカップに石鹸クリームを入れようとするゆうひ(⑪)。れんも関心をもったのか、自分の石鹸クリームをじょうごに入れようとし、ゆうひは、保育者を真似て、れんが石鹸クリームを入れやすいよう、じょうごを両手で支える(⑫⑬⑭)。二人で力を合わせ、カフェカップに石鹸クリームを入れ終わると、また元の、それぞれの遊びに戻った(⑮)。

【保育者が感じたこと】

れんもゆうひもそれぞれに自分のしようとしていることに夢中になって遊ぶ中で、石鹸クリームの感触を味わったり身近な道具を使ったりしながら思考する姿が見られた。ゆうひがじょうごに触れていろいろとやってみようとする姿が、れんの気に止まり、ずっと隣にいる友達がしようとしていることに関心をもつ様子がかがえた。そして、3歳児なりに、友達と「やったね」という気持ちの共有、さらには、保育者を真似て、今度は自分たちで助け合ってやってみようとする姿も見られた。子どもの感性の鋭さに驚かされ、3歳児こそその姿を大切にしたいと感じた。

保育者は、じょうごに手を添える場面までずっと近くで見守っていた。日頃から、失敗することも大事と心得ているものの、この時はじょうごを支え手助けをした。そうしたことで、ゆうひが頬を緩め安心して石鹸クリームを入れる姿や、れんの気持ちも引き付け、互いに顔を見合わせ「うまいった!」という感情の共有につながったと思う。

【じょうごっていいな!】(R3.6.1) (4歳児)

4歳児になって6月。ゆうひがじょうごを使って、石鹸クリームをペットボトルに入れようとし、時に、じょうごの細い先部分を繰り返し注視している(①・②・⑤)。さらに、すり鉢に作ってある色水のアサガオもじょうごを使ってペットボトルに入れる。じょうごの先のところでアサガオがつかえるのですりこ木で数回突いて押し込もうとする(⑤)。



そして次は、飲むヨーグルト用の小さいボトルに、アサガオと色水を、今度は割りばしを使って入れようとする(⑥・⑦)。小さいボトルに色水を入れる時はすぐにいっぱいになりあふれてしまう。保育者が指摘したり尋ねたりしたわけではないが「いっぱいになっているのは知ってるよ」とじょうごとボトルの間から色水があふれ出ていることに気付きながらも色水を入れ続けているのだと保育者に知らせる(⑧)。そして、ボトルにふたをした(⑨)。



いっぱいになっているのは知ってるよ。



見て。できたよ

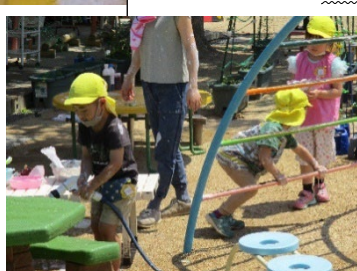


ねえ、見て! できたよ...

何、作ってるの?

ペットボトル2本に石鹸クリームとアサガオと色水、小さいボトル3本にアサガオと色水を入れて机に並べると、もう一度アサガオを自分で摘みに行った(⑩)。すると今度は、摘んだアサガオに目を落とし、じっとみて(⑪)、次に、アサガオ2つをそれぞれの手に持ち、目に当て、近くにいた保育者に「みえるかなあ...ん? 見えない」「ああ、見えたよ～」と嬉しそうに話していた(⑫)。

その後、5本のボトルを、友達のいる黄色いテーブルの方へ持っていくと並べ「見て。できたよ」とれんに声を掛ける(⑬)。体の後ろで腕を組み、とても満足気である。しかし、れんは自分の遊びに夢中でゆうひの声に気付かない様子。するとゆうひは、れんの後ろから近づき肩に抱きつき、再度「ねえ、見て。できたよ」と声を掛ける(⑭)。そして今度は、れんの手元の様子が近くで見えたからか、関心がそこに移っていた。



れんは、絞り袋の中に泡クリームを入れ、スポンジの上に乗せ保育者に見せる。保育者は①「二段重ねのケーキができたね」と言う。

ゆうひは、れんの様子を見てボウルの中に水と削った石鹸を入れて泡立て器で混ぜ絞り袋に移し始めた。水分が多かったのか絞り口の部分から石鹸水が流れ落ちていた。ゆうひはその様子をじっと見つめていた。②保育者が隣で石鹸を削りながら、ゆうひに「泡を増やしてみる?」と言うと、ゆうひは泡を増やしてみようと思ったのか、保育者が削り器で削った石鹸をボウルに入れ泡立て器で混ぜる。

その頃れんは、お皿に乗せてあったケーキを手でぐしゃぐしゃと揉み始める。そして、ケーキに見立てていたスポンジを今度はボウルに移し、スポンジでボウルを洗うような仕草をし始め、「洗い物や」と言う。その後、近くにあったボウル、じょうごを洗い始める。ゆうひもれんの姿を見て、ケーキを作るつもりで持って来ていたスポンジを使ってボウルを洗い始める。二人は、ボウルを洗っているうちにだんだんと泡の感触が気持ちよくなってきたのか、自分の手に泡を塗るような仕草をし始める。③保育者が「先生の手も洗って」と言う、二人は保育者

の手を洗う。保育者の手を洗った後、隣にあったベンチが目に入り、スポンジを使って洗い始める。洗っていくうちに、「洗車や」と言いながら、テーブル・太鼓橋・ブランコの柵を次々に洗っていく。その後、ホースを持ってきて「シャワー」と言いながら洗ったところを水で流していた。

【保育者の意図】

波線①:れんが自分でケーキを作った満足感を受け止めたいと思った。また、スポンジを二段重ねにしてケーキを作っていたので、そのこだわりも認めたいと思った。

波線②:ゆうひがれんのようなケーキに乗せるクリームを作りたいと思っているだろうと推測した。ゆうひのその思いを実現できるよう、一緒にやってみることでコツを伝えてみようと思った。

波線③:二人が泡の感触を楽しみ始めていると感じ取ったので、保育者も遊びの仲間となり、保育者自身も手を洗ってもらうことで泡の感触の心地よさに共感したいと思った。

【保育者が感じたこと】

ゆうひは、石鹸クリームなどをボトルに入れたいという思いもあったと思うが、それ以上にじょうごやすりこ木、割り箸などをうまく使って試すことを楽しんでいるようにも思えた。使っていくうちにそれぞれの道具の特徴をつかんでいく過程が読み取れる。写真⑧の「いっぱいになってるのは知ってるよ」と保育者に伝えた時は、こぼれているけど、いいの、大丈夫という思いを伝えたかったのだろうか、少し得意げな表情が印象に残っている。一人で夢中になってしまっていたが、満足すると友達に伝えようとする姿も見られ、友達の存在が大きくなっていると感じた。

れんは、ケーキのクリームを作りたいという思いで泡を作っていた。泡を作る過程で手に泡が付き、その感触が心地良くなり作ったケーキをおもむろにぐしゃぐしゃと揉み始めたのかかもしれないと思った。そして、思いがけずスポンジでどんどん泡立つ様子が面白く感じ、「スポンジを使って泡を作ることができるんだ」という新たな気付きにつながったのではないだろうか。さらに、スポンジで泡立つ様子が今までに見たことのある「洗い物」というイメージにつながり、近くにあったボウルやじょうごなども洗い始めたのだと読み取った。ゆうひは、れんの姿が刺激となり「自分もやってみたい」と感じたのではないかと考える。しかし、クリームの水気が多くれんと同じようなクリームにはならなかった。でも水気が多いクリームが絞り袋から落ちていく様子がゆうひにとっては面白く感じられたのではないかと考える。この事例から、子どもたちが遊んでいる中の偶然の出来事をキャッチし、子どもたちが感じている面白さに保育者も共感しながら関わっていくことが大切だと感じた。

この日、れんとゆうひがスポンジを使って泡立つ様子や、洗車のイメージで洗っている姿が見られたことから、スポンジによって異なる泡立ち方や、より洗車のイメージで遊ぶことを楽しんで欲しいという思いで、翌日いろいろな種類のスポンジを用意してみようと思った。

【今日も洗車する!】(R3.6.2)



これコーヒーの音がする!



「今日も洗車する!」と張り切って登園してきたれんとゆうひ。保育者が、「新しいスポンジあるんよ」と言うと早速使ってみようとする。ボウルに石鹸を削り入れ泡を作り、その中に食器洗い用のスポンジを浸し手で揉むと、みるみるうちに泡立ってくる。ゆうひは「もこもこになる!すごい!」と笑顔を浮かべ、「先生、このスポンジ持ってきてくれてありがとう!」と喜ぶ。その後、近くにあったテーブルといすを洗い洗車ごっこが始まる。ボウルに水を足していくうちに、スポンジに水が染み込むことに気付き、水をスポンジに含ませてお互いに掛け合うことを楽しむ。次第に、水で地面がどろどろになり、足で泥の感触を楽しむ始める。すると、ゆうひが「泥と泡を混ぜてみよ!」と言う。れんはタンクに水を汲みに行った際に、ボウルに水が流れ落ちる音を聞き、「これコーヒーの音がする!」と言う。④保育者はベビーバスに水を入れて広い場所へ移動することを提案する。園庭の広い場所へと移動すると、二人はボウルや鍋をいくつか持ってきて、泥と泡と水を繰り返し混ぜたり、ボウルの中の泥をベビーバスに移したりして楽しむ。そうしているうちに、ゆうひは「泥と泡混ぜるとふわふわになる」と言う。だんだんと泥水がコーヒーに見えたのか、コーヒー作りのイメージになる。⑤保育者がグラスを持ってくると、洗車で使っていたスポンジに泥水を含ませてグラスに絞り入れてコーヒーを作り、保育者と三人で乾杯をして飲む。

【保育者の意図】

波線④:二人の水の掛け合いをする姿があり、より広いスペースで存分に泡と泥を混ぜ、イメージを広げ全身を使ってダイナミックに遊ぶことを楽しんでほしいと思った。
波線⑤:コーヒーのイメージで泥と泡をかき混ぜていたのので、グラスに注ぐことでコーヒーのイメージがより広がって楽しめればいいなと思った。

かんぱーい!

かんぱーい!



【保育者が感じたこと】

スポンジに水を含ませて水の掛け合いをしたりコーヒーを作ったりするなど、保育者が予想もしていなかった子どもたちの遊び方が見られた。子どもたちはいろいろな種類のスポンジを使って遊ぶ中で、スポンジに水分を含ませることができることや、スポンジの種類によって泡の出来方が異なることに気づいていたと考える。また、れんがタンクからボウルに水が流れ落ちる音を「コーヒーの音」と表現し、それから泥水を見たことでコーヒーづくりにつながったのではないかと考えた。このことから、色や感触、形だけではなく、音も子どもたちのイメージを広げるきっかけになるのだと気付かされた。

【コーヒー作りたい!】(R3.6.3)



コーヒークリームができた!

昨日のイメージから「コーヒーを作りたい」という思いになり、園庭でコーヒーづくりを始める。保育者は、⑥「先生はコーヒーの上にクリームをトッピングしてみようかな」と言い、泡を作り始める。隣にいたゆうひは「いいねえ〜!」と言い、泡を作ろうと削り器と石鹸を持ってくるが、思うように削れない。ゆうひは普段は保育者と一緒に泡を作ることが多いが、この日はおもむろに石鹸をボウルの中に入れてお玉でぐるぐるとかき混ぜる。すると、だんだんと泡立ちはじめ、スポンジを入れてぐしゃぐしゃと揉みさらに泡立てる。泡ができると、お玉で掬ってコーヒーの

上にトッピングをする。その間れんは、洗面器の中に入り、次に再びベビーバスの中に入り、コーヒーづくりで使っていたコップの中に水を出し入れし始める。コップの中に両手を入れてみると、偶然水が勢いよくれんの顔にかかり、それを何度も繰り返し楽しむ。ゆうひもれんの姿を見て、コップの中に両手を入れて水を勢いよく飛ばすことを楽しむ。

片付けの時間になり、ベビーバスを洗おうとシャワーを流すと、泥と泡が水圧で混ざり合い、ゆうひは「コーヒークリームができた!」と喜ぶ。すぐに近くにあった泡立て器を手に取り、ベビーバスの中をぐるぐるとかき混ぜ始める。

【保育者の意図】

波線⑥:ゆうひがコーヒーづくりのイメージで楽しんでいたのも、保育者が遊びの仲間となり新たな方法を提案することで、よりイメージを広げて楽しめるきっかけになればいいなと思った。

【保育者が感じたこと】

前日から続いていたコーヒーづくりのイメージがより広がって遊んでいたと思う。ゆうひは、これまで泡のクリームを保育者を誘い一緒につくることが多かった。この日は、ボウルの中に石鹸を丸ごと入れて混ぜるという自分なりのやり方で試しながら自分でつくろうとする姿が見られた。それは、遊びの仲間となって子どもたちと一緒に楽しむ保育者の姿から、ゆうひは「先生も、いろいろやってみているんだな」と自分なりに試したり工夫したりする楽しさを感じ取り、「自分もやってみよう」と気持ちが動いたからではないかと思った。そして、自分でやってみようという意欲の高まりと、前日までの「スポンジを使うと泡ができる」という経験からの学びが結びつき、「石鹸をボウルの中に入れスポンジを使って泡立てる」という行動につながったのではないだろうかと思った。

れんは、全身で水を感じながら遊ぶことに楽しさを感じていたように思う。昨年度から水鉄砲で遊ぶことが好きだったため、コップから水が勢いよく出る様子が、以前遊んだことのある水鉄砲のように感じたのかもしれない。また、ゆうひもコップに手を入れて水を出すれんの姿が刺激となり、「自分もやってみよう」と感じたのだろう。さらに、この事例から片付けの時間も子どもたちが発見したり、面白さに出会ったりできるチャンスなのだと気付かされた。シャワーにより泡と泥が混ざった様子をゆうひが「コーヒークリームになった」と表現したのは、その前の遊びでコーヒーの上にクリームをトッピングしたイメージと重なったからだと感じた。子どもたちが自分なりに考え試す姿、またその中での気づきや発見を保育者も大事に関わっていきたいと思った。

【アサガオってじょうごに似てる!?】(R3.6.25)



ゆうひは「先生、見てー!」と興奮した様子で伝えてきた。見ると、アサガオの中に水を入れ、嬉しそうに手に持っていた。

【保育者が感じたこと】

ゆうひは、アサガオの形状がじょうごや絞り袋の形状と重なり、「もしかしたら下の方から水が出てくるかもしれない」と考えたのだろう。ゆうひは、3歳児の頃からじょうごや絞り袋を頻繁に用いて遊んでいる。じょうごで口の狭い容器に移し替えたり、じょうごや絞り袋から流れ落ちる石鹸水をじっと見つめたり、その形状に着目し、そこから水が流れ出ることに面白さを感じているのだろう。身近な道具に興味をもち、こだわって使う中で面白さを感じたり、何度も繰り返しやってみたり、また違ったものに出会う中で「～かもしれない」と思考を巡らせたりするゆうひの姿は「科学する心」の芽生えにつながる姿だと感じた。

【考察】

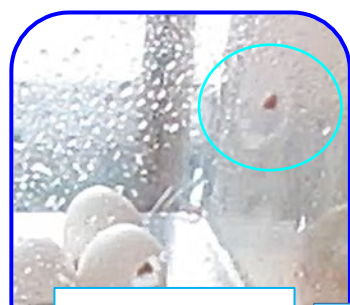
この事例を通して、自分自身の子どもたちへの関わりについて考え直した。まずは、遊びの中での偶然の出来事との出会いと、それに出会って「面白い」と感じる気持ちを大切に受け止めることが大切だと感じた。子どもたちにはいろいろな環境に触れて遊ぶ中で、「どうして?」「面白そう」「やってみよう」という心の動きがたくさんある。遊びの中での子どもたちの心の動きを見逃さず、保育者も、子どもたちの環境に関わる様子や、子どもたちなりの気付きを「面白い」と感じ、子どもたちと遊びを楽しむ姿勢を大切にしていきたいと思う。

また、子どもたちのイメージの広がりについて、感触や見た目によってイメージが膨らむ姿はたくさん見てきたが、今回「音」によってイメージを広げていくれんの姿から、「音」も子どもたちのイメージの広がりを支える要素であることに気付かされた。子どもたちは身の回りのあらゆる事象を感じ取り、諸感覚を存分に働かせて遊びを楽しんでいる。このことから、保育者も身の回りのことを敏感に感じ取る感性を磨き、諸感覚を働かせて子どもたちに関わっていく必要があると実感した。

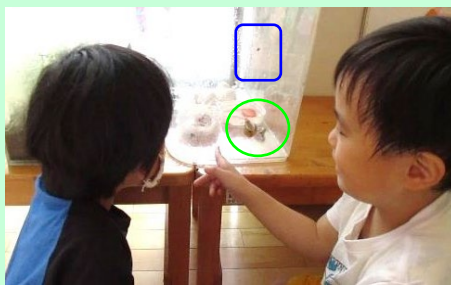
事例4 「カタツムリどうしたん!？」(R3.6.4) (5 歳児)

事例4では、カタツムリを観察しながら、感じたり考えたりしていることを伝え合うけんといろしの姿から『「科学する心」が芽生える過程の構想図』(PI)の♡に視点をあて読み取る。

6 月に入り、「そろそろカタツムリが出て来るかもしれない」と、昨年から飼育していたカタツムリに再び関心をもつようになった。「カタツムリは何を食べるのか」ということがクラスで話題になり、何でも食べる、紙も食べるという話や、卵の殻は食べるのか隠れるのかと議論になり、実際に卵の殻を持ってきて、日中、何度もカタツムリの前で座り込み、食べているかどうか様子を見る子どももいたりした。また、カタツムリがキュウリよりもニンジンを食べる姿を見て「ニンジンの方が好きなんかな?」「カタツムリにも好き嫌いがあるのかな?」と話したり、「オクラ、キャベツはどうか?」といった野菜を持って来て与えたり、いろいろな子どもが関心をもって、カタツムリの様子を楽しみに見る日が続いた。そんなある日、けんといろしが飼育ケースの前でカタツムリを見ながら話をしていた。



カタツムリの跡



2 人が見ている
カタツムリ
(排泄中)

保育者の読み取り

赤の波線部…友達から刺激を受けたり、気持ちが触れたりしていると感じた部分

驚き

カタツムリが口にニンジンをくわえたような様子で壁にくっついていて姿に驚き、不思議に感じている。

不思議

けん カタツムリがニンジン食べながらくっついてる

え!すごい。どれどれ?よく見てみよう!

保

保育者は、よく見えるように飼育ケースの向きを変えた

2 人は顔を近づけてカタツムリをよく見る

もしかして、これ、おじいさんじゃない?

ひろし

ひらめき

ニンジンの形状からおじいさんの髭をイメージし、想像している。

ひろしのイメージを感じ取り、同じように表現してみる。

もっと知りたい

2 人は顔を見合わせて笑う

2 人は顔を近づけて、跡やカタツムリをよく見る

(カタツムリの跡を指さし)ねえねえ、あれはついてないで?

よく見ることで、跡に気づき、疑問を伝えている。

ひらめき

この子の跡がついとるんや。ほらここ!(カタツムリと跡を交互に指さす)

あ~!この子の跡がついとる。降りたんや!(跡からカタツムリへ指を動かす)

なるほど

どうして?

ひろしの「寝ている」という予想を聞き、自分なりに想像し、さらに具体的なイメージで予想している。

ひろしは、カタツムリがくっついてる所を指でコンコンとする

歯磨きせんと食べながら寝よる

寝よんじゃない?

カタツムリが動いていたことに気づき、コンコンとしても動かないカタツムリは寝ているのではないかと予想している。

保

食べよんやとしたら、お口いっぱいに入れとるな

うん

うん

2 人はもう一度カタツムリの口元を見る

吐きそうやで。オエー(吐く真似)

もっと知りたい

けんの吐きそうという表現に共感し、食べているのではなく、吐いているのではないかと予想している。

保育者の言葉を聞いて、もう一度カタツムリをよく見て、その様子から想像している。

2 人は声を上げて笑う

オエーこれ吐いとんちゃう?

驚き

うんちと言ったときのひろしの驚く様子を感じ、やっぱり吐いているのかもと考えが揺れている。

ああ、吐いとるなー。これは、うんちや

これ、うんちなん?

違うで。吐いとんで。ちょっとキュウリ食べて苦しくなって吐いたんで

なるほど

へー。それで食べれなかったんかあ

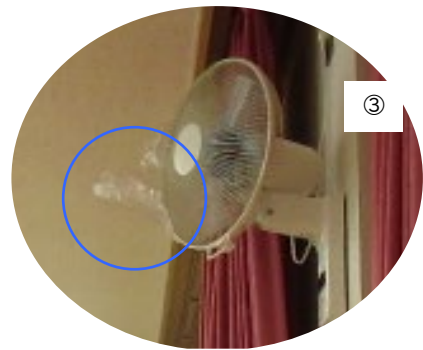
【考察】

- ・ひろしは、今まであまり生き物に興味をもつ様子が見られなかったが、この日は、カタツムリにとっても興味をもって
いる姿が見られた。それは日々、友達がカタツムリに関心をもって関わり、気付きや考えを伝え合ったり、いろい
ろな餌をあげるとどうなるかな?と試したりしている姿を近くで見たり聞いたりしたこと、少しずつひろし自身も「
かも?」など、自分なりの考えをもつようになり、「どうなるのか見ていたい」とカタツムリへの関心が高まってい
ったからではないかと思う。興味をもつようになる過程において、友達が関心をもって関わる姿に出会える環境や、
いろいろな考えを聞く場面などをつくっていくことも重要なきっかけの一つになると感じた。
- ・赤で波線部の姿から、けんとひろしは、互いに相手の考えやイメージを聞き、面白いと感じたり、納得したり、時に
は思ってもいない発言に驚いたりすることで、さらに自分の考えを深めたり、広げたりしていると感じた。また繰り
返し、一緒にカタツムリを見つめる姿からは、もっと知りたいという気持ちが何度も湧き上がってきていることを感
じた。それぞれの興味・関心の深まりとともに、同じことを不思議に感じたり、笑い合って面白さを共に味わったり、
どちらかの疑問を共有したり、友達と一緒にだからこその感じ合い響き合う瞬間が、もっと知りたいという気持ちが
湧き上がるきっかけになっていっていると思う。
- ・けんとひろしは図鑑などを見ることなく観察を通して考えを出し合い、カタツムリの様子を捉えを、『食べているの
ではなく、体内から出している』という、より本質に迫るものへと変化させていった。私たち保育者は、安易に既存
の考えや知識を伝えることで、その子なりに自分で感じ・考えつかみ取ろうとしている気付きの芽をつんでしまう
ことがないよう、子どもたちの内から湧き出る力を心から信じ、尊重して関わっていかなくてはと思った。

事例5 「ふわふわって落ちてくるようにしたい」(5歳児)

事例5では、パラシュート作りに試すことを楽しみながら取り組むけんとひろしの姿から
互いの❤️や見る・考える・試す・気付く・表現する・伝える・触れる・感じるがどう絡み合い、どんな経験へと
つながっているのかを読み取る。

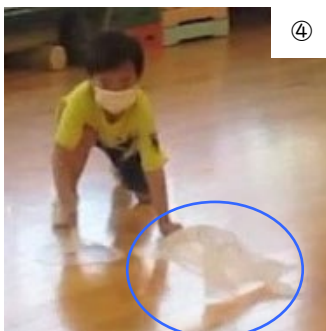
【ビニールが浮いた!】(R3.6.24)



数日前、園の夏まつりでくじの景品としてもらったパラシュートに関心をもち繰り返し試して遊ぶ姿があった。
そこで、子どもたちが自分で作れるようにと、ビニールのシートなどの材料を準備しておいた(①)。すると、ビニ
ールが風にひらひらと飛ばされ、その様子に気付いたけん、ひろし、しゅんすけは面白がり、ビニールが床に落
ちると、また飛ばして楽しんでいた。偶然、ビニールが空気清浄機の上に行った時、ふわふわと真すぐに上へ
浮かんていった。三人は「わ～」と歓声をあげ、その後何度も吹き出し口にビニールを持って行き飛ばしていた
(②)。すると今度は天井近くの壁掛け扇風機にビニールがひっついた(③)。扇風機を止めてみるとビニール
が落ちてきた。その様子を不思議だなと感じたり、風の動きによってビニールが飛んだり落ちたりする面白さを
感じているように思った。そこで他にも風の面白さを感じられるよう、団扇を準備してみることにした。

【保育者の読み取り】

- ・最初、風に飛ばされ、舞い上がったビニールがひらひらと落ちてくることを面白いと感じていた。そして、空気
清浄機から出る風によって舞い上がった、扇風機に引っ付いたりといった思いもよらないビニールの動きに
さらに面白い・不思議・どうして?とビニールと風との関係について興味・関心が高まっていっている。



ひろしがビニールを上に向けて、けんとしゅんすけの三人で扇ぎ始める。三人は上下に団扇を動かし扇ぐがビニールは落ち、部屋の隅にいつてしまった。ひろしはビニールを拾い、一人で扇ぎ始めた。床から少し浮いたところでビニールの高さに合わせ床を叩くようにして扇ぐと、ビニールは扇ぐ方向に少し浮き上がったが、扇ぎ続けると飛んでいき、追いかけていた(④)。けんは、別のビニールを持って来て団扇を両手に持ち扇ぎ、ビニールが落ち始めると団扇をビニールの下から引っかけるように扇いだ(⑤)。すると上がり、落ちてきそうになるとまた引っかけるように扇ぐを、3回ほど繰り返すと自分の頭の上の方にビニールが上がっていった。自分より高く上がったビニールを下から扇ぎ続けた。ひろしも団扇を両手に持ち、扇いでいると、自分より高く上がった時、ビニールの下から飛びながら仰いだ(⑥)。しゅんすけは、けんと一緒に扇ぎ始めた。しゅんすけが扇ぐと前に流され、それをけんが下から引っかけるようにするとビニールが上がっていく。扇ぐのをやめるとビニールがゆっくり落ちてきた。その後、興味をもった友達三人が加わり、六人で、1枚のビニールを扇ぎ始めた。すると天井近くまで上がり「わー!」とみんなで喜び、ビニールが落ちないように扇ぎ続けた(⑦)。

【保育者の読み取り】

- ・偶然出会った出来事から面白さを感じ、何度も繰り返し遊ぶ中で、団扇の動かし方のコツを掴み、ビニールをひっかけて、空気を上にあげるように下から上へ団扇を動かしたり、床を叩くように団扇を動かしビニールを上げるようにしたりと、扇ぎ方で風の向きが変わることを感じているようだった。どうして?と考えながら自分なりのコツを掴んでいく過程は、団扇の動かし方とビニールの動きの関係を感じ取り、そこからの気づきを活かしていくといった、試すことの連続だと思った。
- ・だんだんと仲間が増え、六人ですと、天井の方まで上がり、ふわふわと浮いていたひとは、数秒であったが「すごい!」という感動を友達と共有し、みんなの風の力が合わさっているという感覚を味わったのではないと思う。

【パラシュートめっちゃ飛んだ】(R3.7.19)

登園後、ひろしは「パラシュート作ろう」と廃材コーナーに行き「ふわふわって落ちてくるようにしたい」と保育者に伝えてきた。ひろしにふわふわというイメージを詳しく聞いてみると、両手でビニールを持ち、左右に小さくゆっくり揺らし表現した。ひろしはペットボトルのキャップ・ヤクルト容器・一口ゼリー容器・小さいプラスチックカップなどを手に取っては、元に戻しながら考えている様子が見られたが、「これにしてみる」と一口ゼリーの容器を選んだ(①)。けんも興味をもち、思い思いに材料を選び、一緒にパラシュートを作り始めた(②)。



【保育者の読み取り】

- ・ひろしが『ふわふわって落ちてくるようなパラシュートを作りたい』と考えたのは、ビニールを飛ばして遊んだ時のビニールの動きを思い浮かべて、工夫したらできそうと感じたのかもしれない。
- ・ひろしが手に持っては、元に戻すという姿からは、微かな重さの違いを感じ取りながら、予想し選んでいることが伺える。そして、「これにしてみる」と一口ゼリーの容器を選んだ時は、「これなら、ふわふわってなるかも」と自分が選んだ物で試してみることにワクワクする気持ちが膨らんでいたのではなかと思う。

二人は作ったパラシュートを持ってカラーボックスの上から繰り返して飛ばしていた。保育者は、もっと高い所から飛ばすとひろしのふわふわのイメージがよく分かるかとも思い「もっと高い所から飛ばしてみたらどうかなあ?外に高い所があるかも」と声を掛けた。二人は戸外へ行き、滑り台の上からパラシュートを落とし始めた。

ひろしのパラシュートが風によって砂場の方まで高く遠くへ飛んで行き、二人は「わめっちゃ飛んだ!」と興奮していた(③)。ひろしに続いてけんもパラシュートを飛ばしてみたが、下にゆらゆらと落ちていき、けんは「あれ?」と笑い、ひろしも「あれ?あれ?」と笑う。二人は、その後何度も繰り返していたが、パラシュートは、風に押し戻されるように帰ってきて柵に引っかかったり、すぐ下にゆらゆらと落ちていたりしていた。



【保育者の読み取り】

- ・パラシュートが風に乗って高く遠くへ飛んだ感動を一緒に味わい二人の興味がぐっと高まったように感じた。
- ・けんとしゅんすけが、「あれ?」と言いながら、パラシュートの動きを見て笑ったのは、ひろしのように、高く飛ぶことをイメージしていたのに、ゆらゆらと落ちていく様子が、予想外で、そのギャップを面白く感じたのかもしれない。また、パラシュートが思ったように飛ばなかったことから、「どうして?!」という気持ちが生まれ、何度も繰り返す姿につながっていると思った。

けんは、パラシュートを揺らし、風を待っているような様子だった。しばらくして風が吹いてきたので、保育者が「なんか涼しい！風がきたよ」と声を掛けた。けんがパラシュートを持ち上げるとビニールが膨らみ、手を離すと少し風に乗れ、滑り台に落ち、そのまますべっていき、三人でその様子を見て笑い合った。ひろしが飛ばしたパラシュートは、テントウムシの遊具の方にゆらゆらと降りて行った。パラシュートが風に吹かれて穴の上に行くと、ひろしは「わ～」と嬉しそうに声をあげていた。次に飛ばした時は、二人とも、パラシュートが近くの木の根元に飛んで行った。けんは「やっぱり、パラシュートも仲良しやな」と言い、ひろしと一緒に取りに行った。滑り台に帰って来る時、けんが「テントウムシの真ん中を狙うわ」と言うと、ひろしも「テントウムシの真ん中狙うよ」と言い、「3・2・1」と掛け声を掛けて、互いのパラシュートの動きと一緒に一喜一憂しながら何度もやってみていた。(④)



テントウムシの遊具

【保育者の読み取り】

- ・けんの「やっぱり、パラシュートも仲良しやな」という言葉から、一緒に遊ぶことが嬉しくひろしのことが大好きな気持ちが伝わってきた。一緒に嬉しいと感じている気持ちがあるからこそ友達の言葉に気持ちを向けて聞いたり、友達のパラシュートの動きを自分のことのように感じて一緒に見たりする姿につながっていると思う。
- ・けんは、風の具合によって狙っているところになかなか落ちなかったり、やるたびに違う所にいたりするパラシュートの動きの特性を感じ取り、それを面白いと感じて遊びに活かそうとしているのだと思った。また、ひろしも、何度もやってみる中で、テントウムシの穴に入りそうになる時のわくわくする気持ちを感じ、それを遊びに生かそうとするけいのアイデアに「いいね!やってみよう」と気持ちが動いたのではないかと思った。

【吹いて～吹いて～】(R3.7.20)

翌日、けんとひろしはパラシュートをもって滑り台に上がった。けんは「今日は全然飛ばんな」と言いながらパラシュートを持ち上げ、風の吹き具合をみているような様子が伺えた。パラシュートは風を受け、少し開いている。ひろしは、パラシュートを左右に揺らしてから、投げている。けんもパラシュートを左右に揺らし「吹いて吹いて」と言って投げるが(⑤)、パラシュートは下に落ちていく。その後、園庭を走りパラシュートのビニールに風を受けながら投げて遊んだ。投げても、すぐに地面に落ちてきていたが、ある時、急に風が吹き、けんの一度地面に落ちていたパラシュートが、再びふわっと浮かび上がり、けんは、驚いたように急いでキャッチしていた。そして、「びっくりした」と言いながら、また走ってパラシュートを投げ始めた。



【保育者の読み取り】

- ・翌日は、前日に比べて風がなかったため、けんが「今日は全然飛ばんな」と感じ、「吹いて～吹いて～」とつぶやいたのは、『風が吹いたら飛ばず』という予想があり、風が吹いてほしいと願っていたからだと思う。そして、ひろしは、左右にパラシュートを揺らすことで、ビニールに風を受けて飛ばそうと、自分なりに工夫しながらやっている。そして、そんなひろしの動きを、けんも取り入れ、左右にパラシュートを揺らすようになっていく姿があった。けんは、ひろしのやっている動きの意味を感じ取り、「揺らすといいのかも?」と考え、自分の動きにも取り入れたのだと思う。そして、それでも飛ばないとすると、より風を受ける方法はないかと考え、園庭を走りながら飛ばすというやり方でやってみていた。継続して遊ぶことで、それぞれの気付きが積み重なり、それを活かしながら次の方法を考え、試してみようとする姿が見られるようになってきていると感じた。

【考察】

- ・ひろしとけんは、様々な場面を通して、互いに良さや、一緒に過ごすことの楽しさを感じ合っており、その積み重ねの中で、互いの考えを伝え合い、楽しさを共有し、感じ合い、響き合って遊ぶ姿につながっていると感じる。
- ・けんとひろしは何度も試してみるうちに、ビニールが風を受けることで飛ばすことに体験を通して気付いていっているように思った。風は目には見えないけれど、何度も飛ばす中でパラシュートの動きや持つ手に風を受ける感覚から、まさに風を体感していたのだと思う。そして、互いの気付きや考えを言葉にして伝え合ったり、相手の遊び方や動きから感じ取ったりしながら、友達と一緒に考えたり試したりする面白さを味わっているのだと思った。
- ・自分の感じたことや考えたことを言葉にして伝えることもあれば、自分の中で思いを巡らせながら、繰り返し試していることもある。保育者が、子どもの動きやつぶやき、視線などから、一人一人の関心がどこにあるのかを読み取り、その思いに共感したり、感じ取った子どもの思いを言葉にして返したり、一緒に考えたりしながら関わっていくことで、子ども自身が、自分の中で芽生えている気付きや考えを大切にされていると感じ、今感じていることを素直に伝えたい、表現してみたい、思いついたアイデアを実際にやってみようという意欲につながるのだと思う。

Ⅲ 子どもたちの姿から学んだこと、今後に向けて

○保育を振り返ることの重要性

日々保育の中で出会う子どもたちの姿から、いくつかのエピソードを選び事例を書き起こしていく過程で、「どうして、このつぶやきをしたのだろうか?」「この行動は、どんなことがきっかけなのだろうか?」など、子どもたちのことをもっと知りたいという気持ちが膨らみ、保育記録を読み返したり、写真や動画を見直したりといったことを繰り返し行った。そして、その場面の前後の様子や、聞き逃したり見逃したりしていた発言や行動を拾い、事実を丁寧に記述していく中で、「このつぶやきは、前日のこの遊びからイメージしたのかもしれない!」「この行動は、体験から〇〇を感じとっているからこそ生まれたアイデアかもしれない!」など、子どもたちが感じ、考え、自分なりの気づきや発見を積み重ねていっている、一瞬一瞬のかけがえのない姿に気付くことができた。時には、保育中に捉えていた子どもの内面の読み取りが、写真や動画を見て振り返ったり、他の保育者と互いの読み取りをディスカッションしたりすることを通して、まったく違った読み取りができることに気付くこともあった。気を付けていても、子どもの発する言葉の意味やしている行動を、自分の経験や固定概念など保育者の主観で捉え、理解しているつもりになっていることもある。その子らしさを引き出しながら、一人一人の感性や考え方を大切に育てていくためには、どこまでも、子どもの目線で、その子の心の動きを知ろうとする保育者の眼差しが必要であり、それには、日々保育を振り返ることが欠かせないということを改めて実感した。

○じっくりと考えを巡らす姿を支える保育者の関わり

子どもたちの心が動き、実際にその環境に関わっていく中で、感じたままにじっくりと考えを巡らせることが「やってみるって面白い」と主体的に行動することの良さや自信、「もっとやってみたい」という意欲を育み、その経験の積み重ねが、一人一人の「科学する心」の芽生えにつながっていくのだと感じた。しかし一方で、子どもたちが考えを巡らせている姿は、本当に丁寧に動きやつぶやきに心を向けて見ていかないと、見えにくいことだということも実感した。日々の保育の中で、子ども一人一人が思考を働かせ、考えを広げたり深めたりしながら心を揺り動かしている姿を、私たち保育者は、ほんの一握りしか見取り、関わることでできていないのだということを常に心に留め、その子なりに『見る・試す・気付く・表現する・伝える・触れる・感じる』ことを通してじっくりと考えを巡らせるような環境を保障していくことを心掛けたい。そして、実践を通して学んだ『子どもの心の動きを見逃さず、キャッチする!』『キャッチした子どもの心の動きをそのままにしない!』『素敵・面白い・試してみよう!と肯定的なメッセージを言葉や態度に込めて伝えていく』ということ大切に関わっていききたい。

○意図する環境と、そこに生まれる偶発的な環境

子どもたちにこんな環境と出会い、こんな経験を重ねてほしいという願いを、教育課程や指導計画の中に位置付け、保育者が意図して環境を構成していくことはとても重要なことである。またそれは、一つとして同じ環境といえるものではなく、その時に集う子どもや保育者によって、天気など自然環境の変化によってなど、様々な偶発的なことが絡み合い、どんな気づきが生まれるのか、どんな面白さに出会うのか、どんな遊びが作りだされていくのかということは多様になるのだと感じた。意図性と偶発性が絡みあうことで生まれるその日、その時、その場面でしか出会えない発見、気づき、学びを大切に、子どもたちとともに、豊かな環境をつくりだしていきたいと思う。

○子どもと共に生活を創り出していくということ

遊びと生活は切り離して考えるものではなく、園生活そのものを、子どもと共に創り出していこうとすることが大切だと考える。子ども一人一人が良さや可能性を十分に発揮できるよう、どの場面においても、その子なりに感じ・考えることのできるチャンスだと捉え、子どもたちに投げ掛け、考えやアイデアを引き出しながら、生活を共に創り出していきたい。また、保育者から醸し出される雰囲気や言葉掛け、何気ない行動から、その時、保育者がどんなことを願っているのかということ子どもたちは敏感に感じ取っている。どんな時も、一人一人の思いを尊重し、共に感じ・考える保育者でいたいと思う。大切にしていきたいことをしっかりと話し、それぞれの保育者が心から実感し、保育にあたることで、子どもたちが『自分の思いが大切にされている』と感じ、主体性を発揮し、互いの良さを感じ合える生活を目指していきたいと思う。